

十勝高等教育まちづくり会議専門部会における 2年間の意見整理・方向性（要約版）

資料2-②

☆基本的な考え、目的・目標など

1. 会議の議論の方向、確認事項

- ① 大学問題ということではなく、人づくりを基本に、地域の活性化とそれに必要な人材育成の観点で取り組む。
- ② ハード(器・箱)は手段であり目的としない。
(地域はどんな人材を求めているか、そのために必要な機能や機関は何かを優先)
- ③ 20年後、さらにその先を見据え、地域のビジョンを持ち、それに必要な人づくり、まちづくりに取り組む。(目先のニーズや課題に捉われない議論)
- ④ 議論から、時間軸を持ったアクションへ移行。

2. 大きな方向性、十勝の核・軸とするもの

- ⑤ 国の戦略と連動させた十勝の動きを作っていく。
マーケットを考え、国際戦略を持って取り組む。
十勝型で世界のトップを目指す。
- ⑥ 食、農業、環境などの地域特性、優位性を活かし、そこから健康などの関連分野へ広げていく。
(食、農、環境、健康(医療)を核・軸とする。)

3. 高等教育機関の捉え方・あり方

- ⑦ これまでの大学のイメージやシステム・枠組み・範囲に捉われず、新しい形で十勝の「高等教育」「高等教育機関」とは何か、そのために必要なものは何かを柔軟で幅広い視点から整理を行う。

4. 十勝における人づくりのあり方

- ⑧ 人材育成の場は、大学などの学校(文部科学省定義)に限定せず、実務的な場も含め、多様な学び・人づくりの場と捉えて取り組む。

5. 地域づくりと人づくり、高等教育機関との関係

- (地域づくりと高等教育機関)
- ⑨ 高等教育機関と地域づくりとの関わりでは、人づくり、活動の場づくり、地域産業の振興、雇用創出などが循環する取り組みを、高等教育機関が中心に、財団、試験研究機関、農高などの機関と連携(産学官連携、フードバレーとかちの推進)し、一体的に取り組む。

- (畜大との連携、関係性)
- ⑩ 食や農などの地域特性・優位性を活かし、高いレベルでの人材育成や研究等を推進するためには、畜大との連携は重要である。畜大との連携を中心にしながら、地域の高等教育機関、他機関等も含めた幅広い連携を行う。

☆取り組み手法、活用ツールなど

6. 連携推進に必要なもの(人、機能など)

- (必要な人)
- ⑪ 熱意・行動力があり、経営・資金、マッチングなどで適切なアドバイスや調整ができるコーディネーターの存在が不可欠。(十勝には、他の先進地と同様の機能、核となる優位性を持っているが活かされていない。それに必要なもの、欠けているもの。)

- (必要な仕組み、機能など)
- ⑫ 人(プレイヤー等)ー地域の機関等が全てつながり、機能させるための体制づくり、集約化が必要。さらに、地元企業が商品開発、事業化などで自発的に設備等が利用でき、相談・交流できるような環境づくりが重要。(交流サロン、インキュベーション、レンタルラボ、大学設備活用、貸し工場など)

※国内の成功事例となる岩手大学・盛岡市では、地域連携推進センターと構造的なつながる施設(コラボMIU)を設置し、機能面と各機関の人が一箇所に集約され、さらに地域に広く門戸を広げることで、多様な連携につながっている。また、盛岡市、花巻市では、貸し工場を持ち、企業の事業化の進捗にあった支援環境が充実し、企業誘致、工場進出等にもつなげている。

7. 地域に必要なプロジェクト、課題(H26に引き続き議論し、整理すべきテーマ)

- ⑬ 地域の各機関・プレイヤーなどの全てのニーズ(メリット)がつながる地域のプロジェクトが必要。
- ⑭ 畜大インキュベーション入居企業(管外企業)が活かされる取り組みが必要。
- ⑮ 地域課題・企業ニーズに対応した学生教育と、卒業後の地域定着を図るための取り組みが必要。
(育てた人材が外に出ている現状があり、定着を図るための事業、雇用創出・活躍の場づくりが重要)

8. 知の拠点整備(H26に引き続き議論し、整理すべきテーマ)

- ⑯ オランダフードバレーの十勝型として、食・農・環境・健康を軸に、畜大を拠点に、地域のあらゆる機関、団体、企業等が参加する、十勝のための人づくり・産業振興のエンジンとなる拠点づくりを進める。

※まちづくり会議の前記意見(①~⑮)を、知の拠点として整理し、地域が中期・後期で目指す方向性とする。

9. 十勝高等教育まちづくり会議のあり方

- ⑰ これまでの議論から、実際のアクションに移すため、具体的な取り組みを議論できる人選、体制が必要。特に、活動の軸となる大学や試験研究機関等の組織参画が不可欠。
- ⑱ 次の展開へ移行するための現組織の発展的解消を視野に入れ、地域の巻き込み、機運を高めながら、まちづくり会議や畜大期成会の活動の方向性、組織のあり方等を含めて整理。
(大学、試験研究機関、地域関係団体等の会議への参画)

十勝高等教育まちづくり会議専門部会における意見の取りまとめ

☆基本的な考え、目的・目標など

■会議の議論の方向、確認事項

- ① 大学問題ということではなく、人づくりを基本に、地域の活性化とそれに必要な人材育成の観点で取り組む。
- ② ハード(器・箱)は手段であり目的としない
(地域はどんな人材を求めているか、そのために必要な機能や機関は何かを優先)
- ③ 20年後、さらにその先を見据え、地域のビジョンを持ち、それに必要な人づくり、まちづくりに取り組む(目先のニーズや課題に捉われない議論)
- ④ 議論から、時間軸を持ったアクションへ移行

<部会等の意見>

<①関係>

- 基本は人材育成。表現は別にして、それははっきり打ち出し、そのためにどうしていくのかを考える。そのことを皆さんに一度理解してもらうことが必要。
- 今は、地域の人たちを中心にした人づくりが後手になっているような印象。そこに焦点を絞って進めるべき。
- 大学問題ということではなく、地域の活性化とそれに必要な人材育成という観点でやっていく。
- 今やっていることは、外部がやっている事をどう支えるか、どう連携するかの議論が中心。これも必要だが、この会議として、何を重点的に主体的にやっていくかが、これからの進め方として必要。それはやはり人づくりではないか。それをどう進めるか。

<②関係>

- 最初に入れ物を決めてかかるのではなく、地域でどんな人材を欲しがっていて、それについてどんな組み合わせの教育機関がいいのかという話をするのが重要。
- 大学を作る事を目的(つくらない、目指さないということではない)とするのではなく、地域をどう活性化し、発展させていくか。
- 高等教育の機能、人材育成をどうしていくのかを考え、そこをしっかりとやっていく。人づくりを軸に畜大との連携も考えるべき。
- 畜大は畜大として大事。大谷や農高もある。大学を作らないという意見はないが、作る事が目的ではない。その言葉に縛られるべきではない。

<③関係>

- 人材育成に10年、それが生きるのに更に10年。目先のニーズで物事を考えるということではない。少なくとも20年先を見据え、地域をどうしていくのかということをイメージする必要がある。そうした意味も含めて、「まちづくり会議」としている。
- 農業の付加価値をつける取り組みもいいが、50年、100年先の十勝の変化を見据えて、何をどうしていけばいいのかの議論も必要。
- 民間が大学をどう使えるのか、他所の大学が十勝をどう使うのか、ビジョン、機能、メリットを明確にする必要がある。
- 今ある資源、畜大、大谷と連携しながら、地域のビジョンを立てて人づくりをしていくことがまちづくり会議の思い。今一度、その原点に立ち返って、26年度からの事業の軸にすべき。

<④関係>

- 会議では、議論をし続けることが目的ではなく、そろそろアクションを起こしていく必要がある。
- 北大荒磯先生の提案フードバレーの戦略も、時間軸が必要。そこをみんなで共有し、具体的な行動に移す必要がある。

■大きな方向性、十勝の核・軸とするもの

- ⑤ 国の戦略と連動させた十勝の動きを作っていく。
マーケットを考え、国際戦略を持って取り組む
十勝型で世界のトップを目指す。
- ⑥ 食、農業、環境などの地域特性、優位性を活かし、そこから健康などの関連分野へ広げていく。
(食、農、環境、健康(医療)を核・軸とする。)

<⑤関係>

- ワーヘニンゲン大学も、国の戦略と一緒に動いている。十勝も国と一緒に動いていくことが重要。
- 十勝には、札幌でできないことがたくさんある。小回りが利く、生産量がすごい。そういうものを積み上げて、そこに説得力を持たせる。マーケットもきちんと考える。地産地消はマーケットが小さい、札幌もせいぜい190万人。例えばイスラムなど、国際戦略を考える必要がある。
- 十勝型で世界のトップを目指していくことにつなげる。

<⑥関係>

- オランダのフードバレーの例では、ワーヘニンゲン大学がゲノミクスをDNAレベルで解析。それわ技術基盤として、ネスレなどの大手企業が集まり、成長し、寄附講座などもできてきた結果、フードバレーになったと聞いている十勝でも、そんな絵を描きたい。
- 海外大学と畜大との連携を考え、そこ付随した地域特性をアピールしていく。
- 地域特性、優位性、その辺りをはしっかり上手く伸ばしていく。
- 上田市(信州大学)では、繊維を軸に、地域産業にうまくつないでいた。十勝では、農業、もしくは食に焦点を絞れるのではないか。
- 十勝は農業が核で、そこからの広がり食・健康がある。市の福祉センターや病院なども関わるなど、地域にも広がっていく。
- オランダには、元々ゲノミクスという核となる技術があり、企業が世界から集まった。信州大学もターゲットを絞って、繊維の先端技術という核を持っている。十勝でその核となるのが農業・食品分野。

■高等教育機関の捉え方・あり方

- ⑦ これまでの大学のイメージやシステム・枠組み・範囲に捉われず、新しい形で十勝の「高等教育」「高等教育機関」とは何か、そのために必要なものは何かを柔軟で幅広い視点から整理を行う。

<⑦関係>

- 高等教育の言葉に対し、メンバーそれぞれ異なった独自のイメージを持っている。
- 高等教育の捉え(高等教育とは)として、専門的なことを含めたレベルが重要。
- 高等教育には、専門学校的なものも当然入る。
- 我々は20世紀型教育システムの中で高校や専門学校を位置づけている。大学まで行って4年間やる必要のあるものもないものがある。この地域の高等教育って何なのかを整理する必要がある。
- 今までと違った新しいタイプの研究領域・事業領域が「農」の周りに生まれてくる。今までと違った形で高等教育機関を考えるべき。
- 高等教育には、地域の独自性を活かした幅広さを持つ必要がある。

■十勝における人づくりのあり方

⑧ 人材育成の場は、大学などの学校(文部科学省定義)に限定せず、実務的な場も含め、多様な学び・人づくりの場と捉えて取り組む。

<⑧関係>

- 人材育成というのは何か。人材育成は大学だけじゃない。専門学校でも良いし、実務的な中から人材育成ができる。幅広く、そういう体制が必要。
- 世の中の動きを見極めながら、人材育成をやっていく。
- 全世界に十勝の営業マンをつくるような人材育成を展開し、そのための学部等々を広げていくことを考えるべき。
- 農業や食を専門にした人材を、大学とどうリンクさせるかを考える必要がある
- 十勝の農業は相当変わっていく。変わっていかなければならない。変わっていける環境づくり、人材育成が重要。

■地域づくりと人づくり、高等教育機関との関係

(地域づくりと高等教育機関)

⑨ 高等教育機関と地域づくりとの関わりでは、人づくり、活動の場づくり、地域産業の振興、雇用創出などが循環する取り組みを、高等教育機関が中心に、財団、試験研究機関、農高などの機関と連携(産学官連携、フードバレーとかちの推進)し、一体的に取り組む。

(畜大との連携、関係性)

⑩ 食や農などの地域特性・優位性を活かし、高いレベルでの人材育成や研究等を推進するためには、畜大との連携は重要である。畜大との連携を中心にしながら、地域の高等教育機関、他機関等も含めた幅広い連携を行う。

<⑨関係>

- 高等教育機関、人材育成が、地元企業に必要な人・知識の提供、新しい産業創出など、地域産業にどう貢献していくのかということが大切。マディソンでは、大学が中心になって動いていた。
- 知を教えるだけの大学ではなく、未来に向けて活躍してもらえぬ人材や場をつくるというのが地域づくりのための大学。フードバレーとかちの動きと、高等教育のあり方、産学官連携のあり方が皆一つのステージに乗っている。
- 地域の取り組みの軸となるのがフードバレーであり、その中に、高等教育機関、畜大、財団、農高が連携して取り組む。高等教育機関を、ネットワーク強化のツールなどで活用。
- 地域産業・食品加工と結びつけ、一次、二次、三次産業へと展開し、雇用につなぐことが地域活性化につながる。そのためにも、畜大の特色を活かすことは良い事。地域に、そうしたことを共通認識に立てるような発信が必要。
- 地域に大学や附属機関があり、そこに雇用され、良質な仕事ができる環境があつて、それらが循環する地域をつくりたい。
- 行政と民間と大学の立ち位置に差があるので、この段差を埋める事が大きな課題
- 大学から優秀な人材を輩出しても、地域の受け皿、環境、活躍の場がないのが実態。そうした場をつくってもらいたい。例えば、公的研究機関での人材登用など。

<⑩関係>

- 十勝が目指す高等教育機関が唯一個性を発揮できるのは、食や畜産の土壌。それを活かすために、畜大が必要となる。畜大は、まちづくりのための協力機関、連携相手であつて、畜大自体をどうするかということがこの会議の目的ではない。(畜大整備拡充促進期成会が別にある。)大谷短大農業高校なども、連携相手として、どう活用していくかということも含まれる。そのため、「大学」ではなく、あえて「高等教育」という名前に変えた。
- まちづくりの視点から、十勝が畜大とどう連携するか、協力してやるか、どうアプローチするかということ。
- 十勝において、高等教育の軸を高いレベルで築くときに、畜大の様々なポテンシャルを活用することは必要。
- 地域の力を活かすなら、畜大との連携は大事
- 人づくりには、畜大との連携も大事。フードバレーとかちの推進にも資すること。
- 畜大が、これからどう魅力を持って持続的に発展していくのか。それと連携して事業検討すべき。

☆取り組み手法、活用ツールなど

■連携推進に必要なもの(人、機能など)

(必要な人)

⑪ 熱意・行動力があり、経営・資金、マッチングなどで適切なアドバイスや調整ができるコーディネーターの存在が不可欠。(十勝には、他の先進地と同様の機能、核となる優位性を持っているが活かしきれていない。それに必要なもの、欠けているもの。)

(必要な仕組み、機能など)

⑫ 人(プレイヤー等)ー地域の機関等が全てつながり、機能させるための体制づくり、集約化が必要。さらに、地元企業が商品開発。事業化などで自発的に設備等が利用でき、相談・交流できるような環境づくりが重要。(交流サロン、インキュベーション、レンタルラボ、大学設備活用、貸し工場など)

※国内の成功事例となる岩手大学・盛岡市では、地域連携推進センターと構造的なつながる施設(コラボMIU)を設置し、機能面と各機関の人が一箇所に集約され、さらに地域に広く門戸を広げることで、多様な連携につながっている。また、盛岡市、花巻市では、貸し工場を持ち、企業の事業化の進捗にあつた支援環境が充実し、企業誘致、工場進出等にもつなげている。

<⑪関連～必要な人>

- 他の先進地事例から、一人の強力な(本気で取り組む)コーディネーターが必要。
- 岩手大学・盛岡市では、長野と同様の施設整備等があつたが、ここにもそうした機能がないわけではないが何故機能しないのか。やはり強力でマッチングさせる人が不足している。大学が持つ知財を、地域にアピールすることも足りていない。花巻では、経営のノウハウや資金面でのアドバイスをしていたが、それができる「人」が大事。
- 信州大学・上田市は、施設機能の充実もあるが、コーディネーターがすばらしかった。広げるのも繋ぐのも「人」が大切。畜大を活かすのも、全て人。そこが課題ではないか。
- 十勝には、信州大学やオランダのような施設・機能が一通りあると思う。何がかけているかとやはり「人」。特にコーディネーターの部分が非常に大きな課題。オランダでは、核となる技術を持ちながら、大学と行政等が協力し合い、指南役となるコーディネーターもいる。特に、人が重要。十勝では、人材育成事業でも、プレイヤー、リーダーの育成をしているが、現状、そうした役割を担えるコーディネーターがこの地域にいない。今そうした人材を必要としている。

<⑫関連～必要な仕組み、機能、施設など>

- 先進地と十勝の違いとして、機能面では十勝にも一応一通りあるが、岩手の場合は、それらが全て一箇所に集中しているところが違う点。長野の繊維のように核となるものは感じられなかったが、機能面と各機関の人が一箇所に集約され、さらに地域に広く門戸を広げることで、人(プレイヤーなど)ー機関ー機能が全てつながり、機能させている。さらに、盛岡・花巻にも、核となる人がいた。
- オランダは、仲間意識が非常に強い民族性を持っている。北海道の農業関係者は、逆に仲間意識が薄い。そこが違う。
- 信州大学・上田市の産学官連携施設は、大学、県、市レベルの複数階建てのような感じで機能し、インキュベーション施設も充実。大学の研究施設を、一般の社会人が自発的に利用できる仕組みや、大学の知的財産を地域に還元する仕組みもあり、オランダの仕組み、信州大学の仕組みと十勝との違い(機能が不足しているのか、施設機能があるのであれば何が違うのか)を分析し、対応すべき。
- 盛岡市は、ものづくりの一連の流れの中で、最終の出口の部分が完璧にできていた。それをならって、十勝はどういう形に持っていけるのか。畜大にも地域連携推進センターがあり、そうした役割もあると思うが、盛岡のMIUのようなものが横にないと難しい。それを担うのか、食農医連携研究センター。その中で財団も含めて、地域で強力でやっていく必要がある。
- 今までも大学と研究開発などやってきて、商品化してきたが、資金も結構かかり、さらにその先で事業化できそうなアイデアも持っているが、開発研究までいかない。行動力はあつても前に進まないも我々は何をすべきか、アドバイスが必要。
- 新商品開発などしたいと思っている個人の事業者をサポートできるようなものが必要。
- 農家などを対象に、畜大の先生を講師に、農畜産物の付加価値付けの講義をってもらうことで、プレイヤーの掘り起こしに繋がるのではないかな。

- 食関連の事業化に向けては、盛岡・花巻のようなレンタル食品工場がぜひ必要。
- 視察の中で、貸工場の部分が一番驚いたところ。このところが地域の中小企業が困っている部分。商品化に貸工場があると、一連の流れ、投資につながる。貸工場は十勝にない機能。

■地域に必要なプロジェクト、課題（H26に引き続き議論し、整理すべきテーマ）

- ⑬ 地域の各機関・プレイヤーなどの全てのニーズ(メリット)がつながる地域のプロジェクトが必要。
- ⑭ 畜大インキュベーション入居企業(管外企業)が活かされる取り組みが必要。
- ⑮ 地域課題・企業ニーズに対応した学生教育と、卒業後の地域定着を図るための取り組みが必要。
(育てた人材が外に出ている現状があり、定着を図るための事業、雇用創出・活躍の場づくりが重要)

<⑬関係-ビジネスモデル>

- ビジネスモデルが重要。大学の要求、市の要求、企業の要求、様々あるとき、これらの要求をつかってビジネスモデルを考える。それをどうやってやるのか。今、日本の産学官はそこから出て行きにくい。NPOを作って、非営利であるが、一人二人雇うことくらいできる。そこでビジネスモデルをやる。そのため、まずは十勝のビジネスモデルを考えることから始める。

<⑭関係-畜大インキュベーション入居企業の活用>

- 畜大インキュベーション入居企業(大手企業)に取っては当たり前技術を、地元の中小企業に落としてもらうなど、何かないといけない。アンケートみたいなことをやってみたら良い。
- 畜大インキュベーションに入居している企業(現在、5社)が、行政に対し期待していることはないのか。そこにヒントがあるのではないか。入居企業に対し、アンケートを行い、行政・地域に期待する事を聞いてみると、地域に、信州などにあるような施設・機能が欲しいというようなことがあるのではないか。

<⑮関係-学生>

- 学生を、地域の企業に送り込むことができれば、卒業生とのつながりで、大学と企業がつながる。それが広がると、卒業生のネットワークなど、企業同士がつながる事もできる。大学基金を活用するなど、事業補助、雇用創出、大学との結びつきにつなげてもらいたい。学生の働く場、活躍の場づくりも、この構想の中に組み込んでもらいたい。

■知の拠点整備（H26に引き続き議論し、整理すべきテーマ）

- ⑯ オランダフードバレーの十勝型として、食・農・環境・健康を軸に、畜大を拠点に、地域のあらゆる機関、団体、企業等が参加する、十勝のための人づくり・産業振興のエンジンとなる拠点づくりを進める。
※まちづくり会議の前記意見(①～⑮)を、知の拠点として整理し、地域が中期・後期で目指す方向性とする。

<⑯関係-知の拠点>

- 知の拠点整備は、まちづくりを含めて重要。オランダのフードバレーに学び十勝型でやる。オランダのポイントは、企業にメリットがあり、商品化などの成果までつながっていること。
- 知の拠点の目指すべき姿として、産業振興、人材育成、まちづくり、食・農・環境の十勝の課題のキーワードを盛り込んだ中で、どういう絵姿になるのか。
- フードバレーとかち、それを支える知識とかを、大学と地域が連携し、知の拠点として持つ事で、企業が集まってくる。そうした姿を描くと、実現可能という印象。そうしたところをアピールすると、市民から色んなアイデアが届くのではないか。
- 農協、企業が組み合わさった見せ方の絵になれば、他の企業も来たいと思える絵になる。
- 机上の話ではなく、事業部会が実際に視察で見に来た話を聞くことができ大変参考になった。知の拠点の姿を持ちながら、この会議に色んな人を集めて、レクチャーしてもらって、さらに知恵を出そうということになっていけば、もっと進んでいくと思う。近い将来、こんな風になるというような話も、市民に説明できてる。
- 人づくりという中長期的な話を、知の拠点を一つの軸に置き、畜大と地域のまちづくりのビジョンとしてどうするか、それを来年の事業計画に組み込んでもらいたい。

■十勝高等教育まちづくり会議のあり方

- ⑰ これまでの議論から、実際のアクションに移すため、具体の取り組みを議論できる人選、体制が必要。特に、活動の軸となる大学や試験研究機関等の組織参画が不可欠。
- ⑱ 次の展開へ移行するための現組織の発展的解消を視野に入れ、地域の巻き込み、機運を高めながら、まちづくり会議や畜大期成会の活動の方向性、組織のあり方等を含めて整理。
(大学、試験研究機関、地域関係団体等の会議への参画)

<⑰⑱関係-組織のあり方>

- 連携や協議は、大学・試験場などの方々と、バラバラで議論しても意味がない。
一緒に議論すべき。一緒にビジョンを共有すべき。畜大や、試験場などがこの会議に入っていないのはおかしい。
- 来年は、組織をもう一度組み直して、具体的などころに入っていく。
- 大学の持続的発展と共に、大学と一体となったまちづくりを進めて行くためには、畜大期成会とまちづくり会議が別々に話をするのはどうなのか。
- 地域唯一の4年制大学である畜大は、地域にとって不可欠であり、その整備拡充とまちづくりはセットになる。